

馬の東屋

written by GARUAN

がるあん

SPONGE LABO

私は現在、ミスタードーナツにてこれを書いている。本日は夏本番真つ盛り。自宅からここまでの数百メートルを歩くだけで、私の来ているTシャツは汗で少しだけじっとりとしていた。今はクーラーの真下にある席で冷風を存分に浴びているので、オーバーヒートからの回復は時間の問題かと思われる。

さて、今日は、私が夢中になっている私的メモの話をしよう。

私的なメモとは一体何なのか良く解らない人の為に、まずこれについて説明する。字面だけでは分からない人はまず居ないだろう。メモはメモ。しかし一般的に言われているメモとは少し趣向が違うので説明が必要なのだ。そうは言うもののこれを始めて数ヶ月も経って尚、自分でも良く解らない部分が多いので説明も恐らく訳の解らない内容になると思う。という説明すら自分用なので、その辺りは最早どうでも良い。後に読む自分が理解できればそれでいい。

日々の記録や日記のようなもの、と言えば解りやすいだろうか。今日はどここの喫茶店でこんなことについて考えたとか、話題の映画を見た感想とか、物によっては内容の下らなさは凄まじい。

稀に自宅のパソコンも使うが、大抵は突然思いついて発作的に書く事が多い為、その殆どは外出中に携帯電話のメモ帳アプリに書き込む。

うんこについての考察を、喫茶店で三、四時間程書き続けた事もある。このうんこについて書いたメモは私自身は結構気に入っている。しかしそれはまた別の機会に紹介しようと思う。今日は既に書くことを決めているので、うんこのメモの話題が出た時点で蛇足だった。その情報はこの後全く役に立たないので忘れて良い。

私的メモでは、嘘でも何でもいいから思いついたこと何でもかんでも書きとめる。それは今の私にとって他に変え難い趣味であったりする。

私的メモについての造詣を更に深める為に、書き始めたきっかけについて考える事にしよう。しようと思うなどといきまいた上で何だけけれど、世の中には明確にきっかけがある事の方が少ないように思う。きっかけについて考えてみても、それは既に半年も前の事なのだ。書き始めた当時の記憶は、当然おぼろげである。肝心の何故メモを書こうと思ったかというメモを残していないのが失態であった。今考えた所で思い至るきっかけなんていうものは、そう思いただけのこじつけかもしれないし、自分への言い訳かもしれないしで考えるのは無意味かもしれ

れない。

しかし記録は記録。であれば、初めに書かれたメモを読み返して分析すればいいのだ。

初めのメモは今から半年前、私が前職を離職して無職になった直後に書かれている。見返せばそれはどうやら唐突に始まったようだった。

では原初のメモを紹介しよう。

*

今日は新宿に行く用があつたので仕方なく新宿に向かった。人の多さが圧倒的に凄まじい。頭がクラクラしてくる。ここに居るすべての人は私にとって他人。なんて寂しい話だろう。賑やかな街の喧騒を前に私は明るい気持ちになれない！なんて卑屈なのだろう。

ここに居るすべての人と友達であつたならどんなに良いだろうか。

それは果たして本当に良いのだろうか。

私はどっちに進めば良いのか分からずうろろうろし続けていた。

よく分からないものを書き上げてしまった。

私は今日も生きている。

以上報告終わり。

これには一体どういう意味があるのだろう。

分析しようとした所で今の私には皆目分らないのであった。どうもメモ全体から漂う負のオーラから察するに、ネガティブであったことは伺える。当時は何か思う所があったのかも知れない。しかしはつきりとした理由は今となつては結局解らない。

何はともあれ、この日を境に私の趣味は始まった。原初のメモが書かれた翌日からは、ほとんど毎日これを書いて過ごした。

結局、大した事は書かれずにこのメモも終わる。いかにも私らしいメモなどと、書く度に常々思うものである。

*

私は満二十七歳で、無職である。これは中々インパクトのある見出しだ。今なら付録として独身で彼女無しというのも付いて来る。そんな付録本来に欲しくない。購買意欲が一気に冷める。

そして前職を退職してから現在半年程経っている。私の日々の楽しみといえば、毎日の日課

*

である喫茶店での珈琲を飲むこと、読みかけの小説読むこと、そして私的メモを書く事だった。私的メモについては読んだ人によって感想が異なるかと思われるが、一般的に言ってしまうと暗くてジメジメしたモチない男の薄ら寒い趣味である。こちらについての説明は、先日書いたメモを参照して欲しい。しかしどんなに薄ら暗かろうとも、私はこの趣味の事を結構気に入っている。何故か解らないけれど無性に楽しくて沢山書いてしまう。君も一度試してみると良いと薦めたい。読むのは私なので既に試しているだろう。言いたいことを何でも言えるし、どんな内容でも評価するのは自分だけなのが心地良いのだ。

例えば架空の誰かを作り出してメモの中で話し合ったりも出来る。そうすれば、寂しさも紛らわせる。

さて、何故架空の誰かを作り出してメモの中で話し合ったりする必要があるのでかという説明に移らせてもらう。

私にはこの大都会東京に引越してきて既に七年経っている。私には未だに友人と呼べるような人は居なかった。したがって誰かと話がしたい時は、脳内で友達を作り出す。いやあ、素晴らしいコストパフォーマンスで非常に感服する。二人で遊ぶのに、喫茶店の珈琲一杯分だけで良い。あとは携帯電話に向かって書き続けるだけだ。三百円だか四百円で昼間の時間を食いつぶせる。

二十七歳の男が平日の昼間の時間をただ食いつぶすだけとは中々の贅沢だと、私は突然考え

る。これを自立している沢山の人達に読まれてもしたら、その全員から怒られそうだ。私の家に沢山石ころが飛んでくるようになるかもしれない。したがって、これは自分しか読まないように心掛けている。嚴重なロツク体制で携帯電話を守っている。しかし私は人間との交流がかなり少ない種なので、その機会はまず無いだろう。まず人に携帯を見られることが無い上にロツクも掛けていて、セキュリティだけは異様に万全である。その点については抜かりない。絶対に落とさないように細心の注意も常に払っている。

そして私は無職になって半年経って尚、尚無職だった。無職であり続けた。何故無職であり続けるのかという問いには現在一切答えたくない。ただ半年間の無職生活を経た今でも、社会生活を取り戻したいという気概はまるで無かった。ただひたすらに、無益を生み続ける毎日だった。

全く関係の無い話だが、無益という言葉をインターネットで検索してみた結果、「どぶに捨てる様なもの」という意味だと分かった。正にどぶに捨てるような生活であった。情けなし。本日の生存報告は、これにて終わる。我、これより自宅に帰還。

*

現在練馬駅前のミスタードーナツでこれを書いている。

今日は練馬という街について紹介しようと思う。私が練馬に住み始めてから、既に二年は経とうとしている。そろそろこの街についての考察を総括すべきだろう。

東京都心から西に十キロ程離れた場所にあつて、色んな場所への電車やバスのアクセスが良いい。主に都心で働く人が棲む街で、ファミリー層も多い。いわゆる郊外都市である。

しかしこの街ははつきり言つて面白みに欠ける。この街の魅力は何ですか？と聞かれたら、私はきつと口ごもる。元々人と話すのが苦手なので別の話題でもどうせ口ごもるだろう。練馬という街には大抵何でもある。この街で生きていく上で不自由な事はあまりない。役所が駅から少し遠いくらいで他は大抵駅前で事足りるし、最近では放置自転車を駆逐する爺さん達が闊歩しているお陰で道も綺麗だ。しかしこの街にはこれといった大きな売りが無い。練馬大根というものを私は二年暮らして見て見たことが無い。そもそも近代化開発はされきつていて農家が無い。駅前を通る千川通りは、江戸時代には江戸まで農家が野菜を運んで歩いた歴史ある道らしいが、その面影は特に無い。歴史的に大事にされている場所も私は知らない。あつたとしても、二年その場所に住んでも見聞きしない程度のものである。

ここにはいかにも詰まらなさそうな現実が大挙して存在している。何もかも機能的で夢が無い。町全体から漂う日々の強い香りが、社会というものを嫌でも認識させる。そしてこの街は大きかった。私は生活の激流にいつの間にか飲み込まれ溶け込んでいた。

引越してすぐの頃、私はこの街が好きではなかった。もっと面白い場所に引越せばよか

つたと後悔もした。

しかしそんな感情も時間と共にいつの間にか消える。私は激流の中で転がされ続け、知らない内につるつるで角が無い石ころになっていった。

今ではこの街にそこそこの愛着すら湧いている。それからは街に暮らす人々にも興味が湧いて来たのだった。

最近ではメモの中でもよく練馬に暮らす人々の観察日記を着けている。

そして最近の分析で分かった事がある。練馬を訪れる人の殆どは、恐らくこの街自体には目的を持たない。練馬で遊びたくて一人で遠出して、練馬駅まで来た。という人がもし居たらインタビューしたい。一体あなたの心で何が起こっているのですか？頭は大丈夫ですか？つまり、大概の人がそれ以外の目的を持っているように思う。自宅から近かったからとか、友達に会うためにとか、何であれ練馬でなければならぬ理由が他にあると思われる。つまり集まる人々のタイプは多岐に渡り、これが面白い。人間観察記録が捗る。しかし私自身この街から滅多に出ないからそう思うだけで、同じ事を例えば渋谷駅で始めたとしても結局同じように面白いだけかもしれない。それは確かめてないので解らないのだが。

何であれ私は最近変わった人を見つけると必ずメモを取るようになっている。

練馬の街は、今の私にとっては大変興味深い街である。

今日は、私にとってのベストプレイスの紹介をする。

練馬駅南口を出て徒歩一分、千川通りの横断歩道を渡ってすぐの所にあるミスタードーナツ練馬駅前店。ここが私のベストプレイスだ。ベストプレイスとは安息の地の事だ。安らげる空間。安らぎを求めて私はしょっちゅうここに来ている。

珈琲はなんと二百七十円でしかもおかわり自由。喫煙席は多いので、喫煙家の自分には大変ありがたい。しかもあまり洒落た店ではないのが良い。というのも、私とお洒落な喫茶店の愛称は抜群に悪い。何故か体が拒否反応を起こして背中からじんわり汗が滲んでしまう。落ち着いたインテリアとか、店内で流れているボサノヴァとか、お洒落すぎて逆に使いにくい灰皿とか、とにかく大きな理由は無いが苦手なのだ。

その点ミスタードーナツ練馬駅前店は私のオーダーを完全にクリアしている数少ない喫茶店だった。店内で流れている音楽は謎のミスタードーナツ公式有線放送で、店内のレイアウトは簡素、ソファはやぶれかけているし灰皿は圧倒的に機能的だ。素晴らしい。以上ミスタードーナツ練馬駅前店に対する啓蒙を終わる。ミスタードーナツは最高である。

さて、今日はそろそろ自宅に帰ろうと思う。

*

今日も今日とてミスタードーナツ練馬駅前店で珈琲を啜りはじめてから、もう二、三時間は経つただろうか。メモを書くのも飽きてきたので私は本を読み始めた。現在読みかけの本は太宰治の「晩年」だった。

ロマネスクという短編の「嘘の三郎」という章を読んだ。

三郎という主人公が身の回りの人に嘘を付きまくる話だった。三郎の嘘は幼い頃から天才的で、それに気付く者は彼の周りには居なかった。後ろ暗い過去を背負い続ける主人公の話である。

三郎の嘘は臨場感に溢れていてスリリングで読み応えがあった。中でも三郎が書生達の代わりに彼らの親に仕送りのお願いをしたためた手紙を代筆するくだりがとても気に入った。天才三郎が代筆した手紙は非常に効果的で、書生達は親からまんまと仕送りをせしめる。そして三郎が代筆した手紙の内容も細かく書かれていて、これに私は驚いた。

その内容は、私自身がいつも親に仕送りをお願いするとき心にかけていることとほとんど全く同じであったのである。ババン！

ババンではない。ああ、何ということだ。情けない。

しかしこの共通点に何故だか心はほつとした。いやこれも情けない。どれもこれも情けない。

私はほっとしたのでコーヒーを啜った。更に深くほっとしてやろうという腹積もりだった。

私の隣の席に若くて綺麗な女性が座った。

細身に黒いストレートのロングヘアに黒色の丈の長いワンピースを着た、落ち着いた感じの女性だ。

断っておくが私はじろじろと彼女を見たわけではない。見たわけではないが解る。これは何故かと言うと私は日々、目の端で物を見る訓練をしているからである。この技を体得するための訓練は過酷を極める。一番良い練習方法は人と目を合わさずに表情を読む訓練をすることだろう。訓練することでやがて視界の端が良く見えるようになってくる。体得まではおよそ二十年は掛かると思われる。即ち今日から始めようと思ってもすぐ出来るものではない。つまり元來人の目を見て話せない人間にしか基本的に出来ない妙技である。

女性は一人らしく、回りを穏やかに見渡しながら珈琲と煙草を楽しんでいた。

私といえば、ただそれだけで中々心踊った。私のすぐ近くに美しい女性がいる。これは私の人生の中でもほどほどに幸福な出来事だ。

私は視界の端で彼女を凝視していた。

彼女の方も、こちらをちらちら見ていると私は気付く。やはり不審だったか！私はすぐに視界の端を使うのを止める。そして携帯電話を体の内側にこそそと仕舞い込む。私の中の危険

察知信号は既にイエローになっていた。

こんなことを携帯で書き綴っているのがバレたとしたら名誉毀損になりかねない。それは困る。しかし禁忌に触れているようでこれはこれで楽しいのも事実だった。私は一体何をしているのだろうか。

罪悪感と背徳感の狭間がスリリングで心地良い。

あれから四時間後程経つただろうか。様々なことがあったので、書き留めておく。

結論から言うと、隣の席から携帯が丸見えだったらしく、彼女の事をかいているのがバレてしまった。声をかけられたのだ。

*

さて、私は今新しいメモを書いている。

前回のメモを読み返す未来の私は、これについてどう思うだろうか。前回はあそこで打ち切りなのかよ！続き書けよ！と怒るだろうか。

しかし少し落ち着こう。ちゃんと説明できるか心配ではあるが順を追って話していく。安心

して欲しい。

まず先に書いた、「あれから四時間経つただろうか」の後から、「バレてしまった」までのくだりは一辺の曇りもなく嘘である。嘘でしかない。

これを書いてるうちに隣の綺麗な女性に対する妄想が膨らんで、気分が上がってしまったのだらう。私は妄想の中で彼女と最終的に仲良くなる予定だった。嘘の三郎の話をしていたので、嘘をつくことの興奮を感じたくなったのかもしれない。罪深い。どっかの国のどっかの時代では死罪だらう。もし現代日本がそうだったなら私は犯罪者だ。また親に迷惑がかかるだらう。ごめんなさい父さん母さん。

違う。そんな話ではない。話を戻そう。

前回のメモの途切れている所まで書いた頃、私の携帯は充電が十パーセントを切ってしまった。今日の外出はここまでにする事にした。

そして更に真実を書くと丁度先の彼女に携帯を覗かれたという嘘のくだりをニヤニヤしながら書いてる間に、当の彼女は店を出ていってしまった。この時の「ああ、現実とは当然こうだよな感」は中々に凄まじいものだった。花畑で気持ちよくひなたぼっこをしていたのに、夢から覚めたらきつたない自室のベッドだった。みたいな感覚だった。いや、ミスタードーナツ練馬駅前店はきつたなくない。例えが下手で申し訳無い。ドーナツはおいしいし珈琲はかわりし放題である。喫煙席も多い。灰皿も機能的で大変良いお店だ。君も行ってみると良い。

違う、そんなことではない。そんなことではなくて、真実の話だ。ああ、これでは狼少年だ。何を言っても真実味なんて無いのかもしれない。しかしこんな事が起きてはやはり書かざるを得ないだろう。

私は、「バレてしまった。」までの部分が嘘だと書いた。つまり声を掛けられたのは嘘ではないのである。

*



この続きはCOMITIA 120(2017/05/06)で!

[P38b]Sponge Labo

小説/文庫/140ページ/フルカラーカバー表紙

¥500(予定)